



西松会新聞

The Yushokai Shimbun

第7号

平成26年(2014)3月1日発行



巻頭挨拶 P.3

- ◎ 緒方 徹 (昭49卒 会長) : 今年思うこと P.3

小平 G 人工芝化への期待 P.4

- ◎ 清水 征四郎 (昭41卒) : サッカーグラウンドの思い出 P.4
- ◎ 山崎 彰人 (昭49卒) : 小平を名実ともに「聖地」にしませんか P.6
- ◎ 川副 陽平 (4年 GM) : 学生側からの想い P.8

リーグ戦を観戦して P.10

- ◎ 鈴木 栄三 (平3卒) : 現役への期待 P.10

戦いを終えて P.12

- ◎ 大倉 祐介 (4年 主将) : 悔しさをエネルギーに P.12
- ◎ 川副 陽平 (4年 GM) : 本当の実力を P.13
- ◎ 田代 健太 (4年 副主将) : リーグ戦に出ることの意味 P.14
- ◎ 大山 航輝 (4年 施設担当) : 四年間を振り返って P.15
- ◎ 荒牧 耕太郎 (4年) : 今年こそ昇格してくれ P.16
- ◎ 中村 瞭 (4年) : 決意 P.17
- ◎ 小野 博充 (4年) : 綺麗ごとは書きません P.19
- ◎ 川口 望 (3年 女子 M) : チームへの思いを糧に P.20
- ◎ 平田 芽子 (3年 女子 M) : お疲れさまでした P.21
- ◎ 加藤 里菜 (3年 女子 M) : 報恩謝徳 P.22

平成 26 年度シーズンに向けて P.23

- ◎ 小泉 武広 (3 年 新 GM) : 情熱と覚悟を持って P.23

東西・西松会有志の会 P.24

- ◎ 松丸 鉦一 (昭 31 卒) : 関東西松会 (シニア) 有志の会 P.24
- ◎ 柴田 暁 (昭 46 卒) : 関西西松会のご報告 P.25

海外便り P.27

- ◎ 篠崎 信弘 (昭 52 卒) : ヒューストンに暮らして 27 年 P.27
- ◎ 松尾 俊彦 (昭 58 卒) : シドニー便り P.29

自由テーマ P.30

- ◎ 神代 祥男 (昭 29 卒) : 少年期と老年期 (プロローグ) P.30
- ◎ 池田 致 (昭 39 卒) : 関東大学 2 部リーグ残留にこぎつけた 1 点 P.32
- ◎ 有田 稔 (昭 44 卒) : 歴史ある「一橋ア式蹴球部」について P.33
- ◎ 大倉 治彦 (昭 56 卒) : 京都サンガ応援記 P.36
- ◎ 伊地知 嗣典 (昭 57 卒) : 蹴球巡礼 : 不毛の国と母国と王国 P.37
- ◎ 谷口 浩 (昭 61 卒) : 東大 OB 戦に参加して P.40
- ◎ 金谷 斎 (平 1 卒) : 雑感 P.41
- ◎ 前田 和也 (平 16 卒) : 卒業 10 年目を迎えるにあたり P.42

編集後記 P.44

- ◎ 福本 浩 (昭 52 卒 編集長) : いやはや、なかなか・・・ P.44

 今年思うこと

緒方 徹 (昭49卒) 西松会 会長

西松会の活動は、1に現役の支援強化、2にOB・OGのコミュニケーション充実にあると思っている。お陰様で、その源となる会費・寄付金は目標を達成することができた。現役の活動も全員で様々な役割分担を強化して、プレーのレベルアップや新人の勧誘に努め、成果を上げつつあると言って良い。現役のHPにあるブログでは様々な思いが率直に表明され、頼もしくもあり、羨ましくもありの印象を持っている。

今年のリーグ戦は春・秋通算の戦いの2年目となるが、試合の大半はアウェーになりそうである。人工芝のグラウンドを持つチームが多く、都学連の首脳も“芝”のグラウンドで試合をさせたいという意向が強いという。私もここ数年リーグ戦でほとんどの試合を観戦したが、やはり人工芝の方がテクニックも含め選手のパワーを発揮できるというのは否めない。奇しくも新聞の連載で「スペインのパスサッカーは人工芝化が進んだお蔭で出来上がった」という記事を読んで、妙に感心もさせられた。小平のグラウンドは長年にわたってほとんど有効な改良が行われておらず、土質は相当悪くなっている。少し強い雨が降ると一面が水浸し状態となり、試合中止の心配が付きまとう。中止された試合は結局後回しとなり、スケジュール面での不利も背負うことになる。小平のグラウンドの問題に対して（サッカー部だけでなく）大学当局は現状では必ずしも真摯に向き合おうする姿勢を見せていない。だが、西松会も現役はもちろん、或いは他の運動部とも協力して、大学側と直接交渉しながら、どのように改善策を取るのか、判断を迫られる時期が近くなっている。OB・OGの皆様にも大いなるご協力をいただく必要が出てくると想定され、是非宜しくお願い申し上げたい。同時にリーグ戦にも足を運んでいただき、現役のプレーに声援を送っていただければ幸いである。

小平G人工芝化への期待

サッカーグラウンドの思い出

清水 征四郎 (昭41卒)

大学のグラウンドの人工芝化を検討するのに関連し人工芝のグラウンドに付き一筆との依頼を受けたが、この点にだけ限定すると書く事は余りない。そこでサッカーを始めてから60年弱にもなるので、その間のサッカーグラウンドに付いての思い出を振り返りながら、グラウンドの大切さ及びグラウンドのプレーへの影響などに付き書く事にする。

中学、高校時代は神奈川県藤沢にクレーと天然芝の2面のグラウンドがある県営サッカー場があった。当時は日本全体でも、あまり天然芝のグラウンドがなく(勿論人工芝のグラウンドは全くなく)、全日本代表の合宿も、ここを使用していた。県の大会のトーナメントで勝ち進むと天然芝で試合ができるので、それが一つの目標ともなった。又、天然芝でやると、当時では珍しいショートパスのスタイルであった我が校のサッカーの良さが発揮でき、一層上手くなったような気持ちになったものである。水戸市で行われた関東大会に出場したが、この時の試合もクレーであった事を考えると、今の若い人たちはグラウンドに関しては恵まれていると思う。

大学時代の小平のグラウンドは現在と向きが90度違い、玉川上水側の林に沿ってサイドラインがあり、夏の暑い日の練習では、できるだけ林の木陰に入って暑さを凌げるように工夫していた。又、夏の合宿時、足首を持たれ腕立てでグラウンドを横断する上腕と腹背筋の強化の為の練習では、土のグラウンドが暑すぎて横断し終わった時には両手の掌が火傷し、全面が火ぶくれして大変だった。三商大戦で関西へ行くと、神戸大のグラウンドは固くて白っぽい土のグラウンドで違和感があったが、彼らが小平のグラウンドに来ると、関東ローム層は滑りやすくやりにくいとぼやいていたのを思い出す。当時のリーグ戦は東大御殿下がほとんどで(現在のようないくつかの人工芝ではなくクレーであった)、石壁がすぐ脇にあるため、コーナーキックを蹴るにもワンステップしかできず苦労した。4年生の時は、その前年の東京オリンピックのグラウンドホッケー用として造られた駒沢の第2球技場の天然芝で行われたが、既に芝も薄くなっていた。

社会人になってからは会社のグラウンドが天然芝であり、同じリーグ所属の他チームも天然芝のグラウンドを持っていたこともあり、ほとんどが天然芝で試合をやることができ大いに楽しんだものである。当時は後輩現役のチームを招いて会社のチームと練習試合を行い、学生たちに喜んで貰った。現在も同じグループの60歳以上のOBが年に1回集まって試合を行うのは飛田給の郵船の天然芝で、ここは戦後しばらく米軍の厚生施設として撤収されていた歴史的なグラウンドである。

小生の記憶が正しければ、ゴルフ場のティーグラウンド以外の日本のスポーツ施設で初めて人工芝を採用したのは、今はない後樂園野球場のファールグラウンドであり、その後しばらくして巢鴨にある三菱グループのサッカーグラウンドが人工芝になった。当時の人工芝は固く、又短いカーペット状で、倒れたりスライディングをしたりすると擦過傷になるため、使用する前には消防用ホースで全面に散水をしたが、今から考えると信じられない光景であった。

数多くの天然芝や人工芝グラウンドができたのは、日韓ワールドカップ開催の数年前でなかったろうか。50歳を過ぎてから高校OB主体のシニアチームに所属し現在もプレーを続けているが、一転して相模川や酒匂川の河原や扇島の公園などのクレーのグラウンドでやることが多くなり、「何故この歳になって、こんなグラウンドで」と思うことが多い。そういう中でも年間約30回プレーする内の3分の1程度は天然芝か人工芝のグラウンドであり、「やはりサッカーは、こうでなければ」との感が強い。大学のグラウンドの人工芝化が実現し、現役諸君も同じような気持ちになればと祈っている。



大学1年（1962年）三商大戦
遠征時、宿舎前での記念集合写真。
4年/3年各6人と、2年1人と
小生。

この年は関東2部で同率3位で、
歴史を見ると1947年以降、
現在まででベストの成績でした。



大学4年（1965年）リーグ戦
最終戦の農大戦？で勝ち、関東
2部残留を決めた試合だと思う。
グラウンドは前年のオリンピック
の為に造られた駒沢第2競技場。

⚽ 小平を名実ともに「聖地」にしませんか？

山崎 彰人 (昭 49 卒)

卒業して丁度 40 年。現役学生の健闘を小平通信やホームページで拝見すると元気づけられ、我が青春が蘇ってくる。私は卒業後、関西社会人リーグで 4 季プレーし、韓国トップチームとの試合で得点したこともあった。五輪代表を目指して努力していたが、サッカーのプロ化と今日の隆盛は予想もしなかった。W 杯出場が当たり前になり、子供たちの技量は当時の日本代表選手のそれを遥かに凌ぐ。現在のサッカーは高い最終守備ラインの間の狭いスペースで高速パスが回る。ボールの品質向上もあり要求される技術や戦術の次元が違うと言ってよい。しかし今の現役学生は幼少からボールに親しみ格段にプレーレベルが高い。尤も他校のレベルも上がっており、近年関東大学の実質 4 部が定位置なのは残念だ。一所懸命努力している学生が更に良い成績を収めることができるよう環境整備と支援をするのが、我々OBの務めと思う。



上：一橋大 vs 三菱重工

千歳船橋三菱グラウンド 1973 年 5 月

左：新日鐵広畑 vs 韓国・浦項製鉄

(当時韓国チャンピオン) 1974 年 6 月

私は選手生活を終えた後 20 年近くを海外で過ごした。帰国後、ご恩返しに西松会代表幹事を 10 年務めたが、退任後を託した西松会幹事団が積極的に学生の支援と OB の親睦に多大な努力を払ってくれていることに深く感謝したい。

現幹事団が小平サッカー場の人工芝化をテーマに検討を進めていることは特筆に値する。最近大学のサッカー場は良質の人工芝が多くなり、人工芝でないと試合のホーム開催ができないというハンディを負って戦うことになる。国立の人工芝化された一橋ラグビー場を見たが見事であり、環境整備によって現役のプレーレベルが向上し成績も上がることが一目瞭然だ。安い投資とは言えないが、ラグビー部に出来てサッカー部に出来ないことはあるまい。私の現役時代は一橋大学ア式蹴球部の創設者であった元最高裁判事・松本正雄大先輩が矍鑠としておられ、正月に4年生全員が西荻窪のご自宅に挨拶に伺っていた。偉大な方でありサッカー部と現役部員をこよなく愛された。松本大先輩のご存命であれば、その号令一下人工芝設置・維持に必要な金額は、あっという間に集まるだろうと思うのは私だけだろうか。

数年前、現役から送られてきたパンフレットに「生まれ変わっても、小平でサッカーがやりたい」という言葉があった。我々が共有する想いだ。現役時代OBの皆様から多くの支援を受けて我々もボールを蹴っていたのであり、繋がれてきた絆を守り受け継いで、更に現役のために支援を拡大して行けたらと思う。

昨年8月に亡くなられた中路大先輩は、「小平は聖地だ」と言っておられた。

100年に亘って学生の熱い思い、血と汗と涙を吸い込んできた小平サッカー場は、意味合いが世代によって異なるとはいえ、やはり「聖地」と呼ぶにふさわしい。最適なプレー環境を整え、松本大先輩のお志を汲み、現役諸君に伝統を継いで更に頑張る為人工芝化を実現し、名実ともに小平サッカー場を「聖地」にしませんか。



小平グラウンドにて 昭和49年(1974)頃

学生側からの想い

川副 陽平 (4年 GM)

2013年シーズンは、東京都2部リーグ4位という結果に終わりました。

あと一歩というところで33年ぶりの1部昇格を逃してしまい、本当に悔しく思っています。

当然来年こそは東京都1部へ、またいずれは関東へといったように、現役側も高い志を持って活動しています。と同時に、上に上がるためには、上で戦うためには、やはり人工芝で練習しなければならないのではという想いも強くなっています。

2013年シーズンから東京都リーグも、ホーム&アウェイ方式で対戦することになりました。

一橋は会場提供のしやすさから18試合中8試合ホームで戦うことができたのですが、昇格のなかった最後の武蔵・大東との2試合で、前期ではアウェイで戦ったにもかかわらず、後期でもアウェイで試合をすることとなりました。この理由について東京都大学サッカー連盟に問い合わせたところ、「最後の試合については選手たちに人工芝で試合をしてほしいから」という回答が返ってきました。僕の主観的な予測ではあるのですが、おそらく2014年シーズン以降は一橋のホームの試合は、もっと減ると思います。先の都学連の回答からもわかる通り、東京都リーグとしては人工芝で試合をしたいわけです。参考までに2013年シーズンの結果を見ると、ホームでの勝率が63%、引き分け率が25%だったのに対して、アウェイでの勝率が30%、引き分け率が40%でした。2009-2013シーズンまでの5年間の1・2部の昇格チームの平均を見ると、勝率が64%、引き分け率が21%と、2013年のホームでの結果と類似しています。単純に考えすぎるのもよくないかとは思いますが、ホームで戦うというのはやはり結果に影響してくるもので、上に上がり、上で戦うためにはホームでの試合を確保しなければならないと思います。

また、この原稿を書くに当たり、1-4年生の部員に人工芝化に対してどう思っているのか、アンケートを行いました。やはり全員が人工芝化による良い影響が多かれ少なかれあると考えており、ホームでの試合が増えるということ以外にも多くの理由が挙げられていました。一番多かったのが「プレー・戦術レベルの向上」です。これは僕がGMをしているときにも感じたことなのですが、土のグラウンドで練習しても、結局は土のグラウンド用のサッカーの練習しかできないのです。ボールコントロールに労力がかかる分DFしやすい、パスサッカーというよりもロングボール主体のサッカーをせざるを得ないなど、土のグラウンド特有のポイントがアウェイの人工芝のグラウンドでは通用しないのです。今後アウェイでの試合が増えると予想される中で、一橋は「人工芝でのサッカー」を練習しなければならないのです。

他にもフィールドプレイヤーも GK も怪我の確率が減ること、新歓のときにアピールポイントになることなどが挙げられています。また GM という個人的な視点から影響が大きいと思ったのが「雨の日の練習が可能になること」です。1年間 GM として練習メニューを組んできましたが、雨が降ってしまえば練習そのものができなくなってしまうことがあります。何とか雨の中で練習したとしてもグラウンドはぐちゃぐちゃで、無理やりボールを前に蹴る練習しかできません。しかし一橋が練習できていない間に、ライバルの大学は練習しているのです。練習の質・量で有名校出身者がいる他チームに対抗している一橋にとって、練習自体ができないというのは非常に苦しいことなのです。

以上、人工芝化することによるメリットを述べてきましたが、学生たちは当然人工芝化がそんなに簡単なことではないということを理解しています。特に費用面は学生たちの力を大きく超えたところにあり OB の皆様のご協力が必要となってきます。しかし同時に僕たち学生は、できることならば早めに結論を出してほしいと思っているのも、また事実です。できるのであれば早目に人工芝にしてほしいし、できないと結論付けられるのであれば、土質の改善など他への投資を行ってほしいわけです。そして何よりも、現役の学生たちは今「強くなりたい」と思っています。そのためにユニット制を敷き、各方面の専門家を呼ぶなどして「変化」を起こしてきました。僕は、ついこの間まで、後輩たちの「強くなりたい」という熱い想いを近くで感じ取ってきたつもりです。現役を引退し OB の 1 人になる身として、後輩たちの「強くなりたい」という想いに少しでも力になってあげたいと思っています。どうか他の OB の皆様も、この現役の「変化」に対して力になれるよう、ご協力していただけないでしょうか。一橋大学サッカー部の総合力の一部として力を分け与えていただけないでしょうか。現役も OB も一つになって戦えるチーム、それこそが真に強いチームだと僕は思っています。その一つとして、人工芝化への OB の皆様のご協力は必ず必要となるはずで、どうか宜しくお願い致します。

リーグ戦を観戦して

🏆 現役への期待

鈴木 栄三 （平3卒）

サッカー部とは長らく関わりが無かったのですが、単身赴任だったこともあり、去年は9試合を見に行きました。見に行くと、やはり気持ちが入ります。一橋がゴールをすれば嬉しいですし、たまに足先だけのプレーを見ると残念に思います。

我々の時代は根性で練習を頑張ってきましたが、現役の皆さんは練習は勿論、練習の準備や周辺の取り組みの部分で、信じられない位頑張っていると思います。ユニット・諸係制での役割分担、栄養管理、ウェブでの情報共有、戦術の文書化・徹底、専門家の指導の元で行うメンタルトレーニング、マッサージ・体幹トレーニング、新人募集のためのイヤーズブック、試合告知のビデオ、数多いサタデーの試合、ツイッター、フェイスブック、更に観戦に来てくれたOBのために、毎回、選手表や最新の星取表を作って配ってくれたり、足の悪いOBのために椅子を用意してくれたりして、現役諸君には感謝しています。



菅平ダボスにて 昭和62年（1982）

10月27日、大東と戦って負けて、現役のみんなは泣き崩れて立ち上がれなかった。

それは、それだけ打ち込んで頑張ってきたからで、このチームが好きだから。4年生は後輩のためにもチームを1部に上げて去りたかった。下級生も世話になった4年生のためにチームを1部に上げたかった。本当に目の前にあったけど、最後の最後に逃した。本当に惜しかった。

リーグ戦も終わり4年生はユニフォームを脱いで引退しましたが、新人戦には4年生みんなが私服で応援に来て、いつもの試合の応援歌を歌っていました。感謝・一体感、感じるところがありました。最近では練習日記もフェイスブックやツイッターで、その都度シェアしてくれていて、私も時々共感しています。皆に注意を促したり、先輩やチームメイトへの感謝の気持ちを表したり、勝った喜び、負けた悔しさを語っていて、みんなが今の時間と場を大事にしてくれているのが分かります。

試合を見ていて、ある日実感しました。これは本当に社会で頑張ることと同じだということ。

熱意、下への気づかい、リーダーシップ、根性、チームワーク。これはみな立派な？おじさんの自分が今求められていることです。リーダーシップとは、チームのために目指す方向をよく考え、その思いを強く持ち、それをみんなと共有しながら引っ張っていくこと。そうしたことのできる人、できない人は周りから見ても全然違う。さらに引っ張っていくキャプテンやGMも勿論大事だけれど、皆がやらないといけないし、やれる人でないと、その後も残念なことになってしまう。

現役の皆さんが、もし今の自分たちでいいのかって思うなら、それは安心していいと思います。

この貴重な時間を精一杯使って、自分とチームの能力・可能性を伸ばし、各人が人間として立派に成長してくれればと思います。

戦いを終えて

 悔しさをエネルギーに

大倉 祐介 (4年 主将)



10月27日。自分たちの1年が否定された日。

今年を振り返れと言われて真っ先に思い出すのは、この日のことだ。

むしろ、この日のことしか思い出さないとっても過言ではない。

勝てば33年ぶりの昇格という大一番、あの日は自分自身のコンディションも、チームのパフォーマンスも悪くなかったように思える。それでも勝てなかった。それは偏に1年間の取り組みが1部昇格のそれに値しなかったからだ。その結果、僕は絶望という言葉でも表せないような複雑な感情を抱えて部活を引退することとなった。今シーズン、主将として過ごしはしたが、今シーズンの行動の原動力に「主将だから」というものは一切ない。純粋に、このチームが好きだった。懸ける思いが強かった。だからこそ10月27日のことは忘れられないし、忘れるつもりもない。それでも唯一チームに残せたと思えることは、2種類の「悔しさ」だ。純粋に大東戦に負けて悔しいと思う気持ち。そして大東戦に負けても、それほど悔しいと思えなかったことを悔しがる気持ち。特に後者は大事にして欲しいと思う。

ある本で、「感情と行動は並行するものだ」という記述があった。

要するに、人は感情によって行動するという側面ばかり注目されるが、行動によって感情が変わることもあるということだ。あの時、それほど悔しいという感情が湧き出てこなかった人。それは単純に、その程度の取り組みしかしていなかったということだ。来シーズンの行動が変われば、生まれる感情も変わるだろう。「悔しさ」というのは非常に大きなエネルギーを生む。本気の取り組みは大きな「悔しさ」や「喜び」を生む。つまり本気の取り組みは、とてつもなく大きなエネルギーを生むと個人的には思う。4年生が1番頑張るのは当たり前、でも、その結果生まれた大きなエネルギーは、もうサッカーへは向けられない。それは非常にもったいないことではないか。来シーズン、後輩たちには自分の本気と戦って欲しい。その勝負に勝てば、自ずと結果もついてくるのではないか。学年に関係なく、全員が自分の本気に勝ち、今シーズンの「悔しさ」のエネルギーを、「喜び」として爆発させて欲しい。

もう直接的な貢献は出来ないけど、僕は、このチームの1番のファンです。

ファンなりに出来ることを「本気で」やりたいと思います。最後になりましたが、天候・場所に関わらずグラウンドに足を運んで応援して下さったOBの皆様、本当にありがとうございました。僕は、このチームを引っ張る立場にいられて本当に幸せでした。またグラウンドでお会いしましょう。

🏆 本当の実力を

川副 陽平 （4年 GM）



OBの皆様、今シーズンを通して応援してくださり、ありがとうございました。最後の最後に1部昇格を逃してしまったことを本当に悔しく思っています。本当の実力がなければ自分たちが望む結果を得ることはできないと、リーグ戦を終えて、しみじみと思っています。当然2部なら2部、3部なら3部に見合った「本当の実力」があるでしょう。今シーズンに関して言えば、果たして1部昇格に見合った「本当の実力」が、一橋大学サッカー部にはあったのかと問われたら、僕はまだまだ足りなかったと答えます。開幕3連勝しようが、前期リーグを首位で折り返そうが、2試合を残して首位にいようが、僕たちは東京都2部リーグ4位なのです。「最後の最後で残念な結果になったけれども、惜しかったね」なんて言葉は、リーグ戦を終えた僕たちにとっては空しい言葉以外の何ものでもありません。そして何よりも最後の2連敗こそが、僕たちの実力不足を物語っていると思います。大一番に気合を入れてくるのは当たり前で、お互い最高の集中力の中で最後に勝負を決めるのは、結局のところ細かい技術・戦術なのです。最後の2試合、武蔵大学も大東文化大学も最高の集中力を発揮していました。もちろん僕たち一橋も最高の準備と最高の集中力を発揮したつもりです。しかし僕たちは、武蔵にも大東に対しても実力が劣っていたのです。1部昇格に見合う技術・戦術を持ったチームこそが最終的には1部昇格をするわけで、最後の結果に偶然などなく、すべて必然なのです。その結果が、東京都2部リーグ4位だったのではないのでしょうか。

僕はもう引退してしまいプレーすることはできないけれども、後輩たちには、とにかく「実力」を向上させてほしいと思っています。それは今年主力として出ていた4年生の実力を追いかけるとか、そういうことではありません。大東戦で負けた後、現役の皆には言いましたが、僕たち4年生の実力では1部昇格はできませんでした。後輩たちに求められることは「ボランチだったら川副さん、センターバックだったら大倉さんみたいに・・・」というお手本を作るのではなく、「川副さんはああやっていたけれども、違うやり方の方がレベルが高いのでは・・・」という風に、今の一橋大学サッカー部のレベルの“常識”を疑い、1つでも2つでも上の次元を目指すことだと僕は思っています。「代替わり」という言葉を戦力の低下と見るのか、それとも現状を疑いレベルアップできるチャンスと見るのか、その違いが、これからの一橋大学サッカー部の実力を決めるのではないのでしょうか。最後に僕はもうOBになってしまいますが、OBの協力というのも一橋大学サッカー部の「実力」の一部になると思っています。来年以降、東京都一部・関東リーグと今よりも上を目指すための実力をつけてもらうために、一橋大学サッカー部に協力し、全力で応援していきたいと思っています。

🏆リーグ戦に出ることの意味

田代 健太 (4年 副主将)



10月27日大東文化戦、今までのサッカー人生で、一番心の底から勝ちたいと思えた試合だった。自分が活躍できるかどうかなんてどうでもいい。ただ本気で勝って昇格したいと思うことができた試合だった。振り返ってみれば自分の部活人生はしょうもないものだった。「チームのために」、「1部昇格のために」、そんなことを言いながらも、心ではそれを自分事に思えない時期が多かった。「チームのために」、「1部昇格のために」とバカみたいに言っている同級生がうらやましかったし、劣等感すら覚えた。「昇格昇格」と言い続けていると感覚が麻痺してきて、「自分は本当に1部昇格したいのだろうか」と、わからなくなることもあった。

そんな自分が心の底から昇格したいと思い始めたのは、秋季第1節でケガをしてからだった。初めて味わう応援席からのリーグ戦は、今までとは全く異なるものだった。試合中に自分に出来ることは応援しかない。応援が試合の勝敗にもたらす影響が大きいとは思えないが、それでも、少しでも勝ちに繋がる行動をしたくて応援をする。まだ入部して1年も経たないメンバーも含め、試合に出られないメンバー全員で。試合に出られないにも関わらず、必死に応援するメンバーを間近で見たのは恥ずかしながら初めてだった。僕はその経験を通じて、リーグ戦に出てプレーすること、そしてチームを背負うという本当の意味を理解した気がした。遅すぎたに違いないが、そこから僕は心の底から昇格を望むようになった。そして、その気持ちがピークに達したのが大東戦だ。自分が活躍するかどうかなんてどうでもいい。チームが勝てれば何だっていい。確かにそう思えた。やっと自分のしょうもない劣等感や小さなプライドから解放され、心が軽くなった気がした。しかし、そんな自分の精神状態は勝敗とは無関係で、試合に勝つことはできなかった。

リーグ戦のピッチに立つことの素晴らしさ、誇らしさ、そして重大さに気付いた頃には、もう自分にリーグ戦の出場機会はほとんどなかった。プレーヤーとしては不完全燃焼であり、ようやく持ち始めた情熱も、ぶつける場所はなくなってしまった。僕はもう二度とあの魅力的なリーグ戦のピッチに立つことはない。その寂しさを胸にしまい、来年からはOBとして後輩たちがリーグ戦で戦う姿を見守っていきたい。

🏆 四年間を振り返って

大山 航輝 (4年 施設担当)



プレー以外でチームに貢献するという点で、今シーズン僕が常に、そして強く意識してきたテーマがあります。それはチームに所属する全員が愛着を持てるチームにして、1部昇格をみんなが心の底から喜べるようにすることです。このようなテーマにした理由は、それまで自分が感じた思いが関わっています。

—昨年2部に昇格した時、みんながグラウンドでビールかけをして喜び合っているのに、自分だけ次の試合の副審をやらないといけなかったりして、チームの昇格を心の底から喜べない自分がいました。サッカー部の目標はリーグ昇格です。せっかくリーグ昇格を達成しても、それを喜べないようではサッカー部にいる意味はないのではないかと、当時の僕は、そう考えました。ただ、その翌年に言葉に言い表すことができないほどの一体感を味わったり、自分がサッカー部に所属する意味などを考えた結果、気づいたことが幾つかありました。例えばサッカー部は現役部員だけで成り立つものではなく、部員を応援している家族やOB・OGの思いの上に成り立つということ。あるいは、これまで気が付いていなかっただけで、自分は本当に多くのサッカー部の先輩・同学年・後輩に支えられていたということ。このようなことに気づいたとき、一橋大学サッカー部への心の底からの感謝と愛着を感じました。そして、もし今年1部に昇格できたら、自分は絶対に心の底から喜ぶことができるようになるようになりました。何よりも部活が、それまでと比べ物にならないくらい楽しく感じられるようになりました。だからこそ、後輩たちにはチームに愛着を持ってもらいたかったし、みんなで心の底から喜ぶために1部昇格を果たしたかったです。

どんなに個人としてチームとして努力しても、目標が達成できなければ嬉しいという感情は残りません。うまく言葉にできませんが、リーグ昇格してチームみんなで心の底から喜びあうことができれば、多分それは一生のうち何度も味わうことの出来ない経験となると思います。来年からはOBとなりますが、一橋大学サッカー部を応援し続けます。最後に、これまで4年間お世話になった全ての方に対して、本当にありがとうございました。

今年こそ昇格してくれ

荒牧 耕太郎 (4年)



入部した日から、あっという間に時間が過ぎ、引退することとなりました。4年の間にはサッカーにまつわる様々なこと、素敵な出会いいろいろありました。私を大きく成長させてくれた一橋大学ア式蹴球部には、ただただ感謝しかありません。2部で戦った去年から、チームとして、個人として、大きな成長の波が訪れたように感じました。その大きな流れに乗れたことは非常に幸運だったと感じると同時に、自分がその流れを生み出す側になれたのかという思いが拭えません。

今思えば後悔だらけの4年間です。

特に去年は、自分が一生懸命か、周りが一生懸命かと気にしてばかりいる1年でした。本気な奴はそんなこと考えないし、大したこともしていない奴に限って肯定する。そんな問いを考え続けていました。「そんなことは自分を正当化するためにしかならない。近くのすごい奴にどうやったら勝てるのか、もっと考えろ。」と去年の自分に言ってやりたいです。しかし、それは出来ないなので、代わりに今年の部員たちに残して終わりにしようと思います。

最後に、現役の御支援をして下さったOBの皆様、本当に有難うございました。

ありがちな惜しくも1部昇格を逃した学年として引退してしまうのは何とも残念ですが、今後はOBの1人として皆様と一緒に試合を応援したいと思います。またグラウンドでお会いしましょう。

 **決意****中村 瞭 (4年)**

引退後の12月、東京都リーグの表彰式に行き参りました。4年間で3度目の表彰式。1年生の時は3部アシスト王、3・4年では2部の敢闘賞・優秀選手賞を頂きました。もちろん自分一人では取ることが出来なかった賞です。一緒にプレイしてきた先輩・後輩、何より同期のみんなに感謝したいと思います。ただ賞を頂いた1・3・4年生の3年間ではチームとしての目標であったリーグ昇格を逃しました。唯一昇格出来たのは個人賞を取ってない2年生の時。僕が個人として目立った年はチームとして成果を残せず、逆にタイトルを取らなかった年では2部昇格を果たしました。そういう意味でも、個人の活躍とチームとしての勝利の関係というのは、4年間ずっと僕が考えてきたテーマでした。

1年の頃、このチームを強くするという決意のもと入部しました。当初はチームとして、もっとサッカーに対して高い意識を持てるんじゃないか、準備やサッカーの技術一つ一つに対してもっと細かく気を配れるんじゃないか、そう考え、周りに要求していました。でも振り返ってみると、当時のやり方は全く良くなかったと思っています。チームの中でも孤立気味でした。当時は自分の考えだけが正解で、周りにそれを押し付けるだけでした。そして、とりあえず自分が活躍すればいい、そんなことだけを考えてました。結果としてリーグではアシスト王を取ることになりましたが、チームは3部3位に終わり、目標達成はできず、この年のシーズンオフに何となくですが、「このまま来年も同じことをしてはいけないな」と思ったことを覚えています。

この1年生の時の反省を基にして2・3・4年生のときは周りとは話すことを増やし、チームに求められている役割を考えた上でプレーすることを心がけました。周りとは話すことは、みんなの考えを聞き何をしたいのかを知るという意味で大事であり、それ以上に、自分には周りの意見を聞く用意があるということを示すという意味でも非常に大事なことであったと学びました。意見を言われたいというのは自分の成長にとって非常にもったいないことです。ただし、これに関しては最後まで十分に出来てなかったのが、今後の課題です。

チームに求められている役割を考えることについては、つまりチーム視点を持てているかどうかということです。単に自分のためだけに我を通すのではなく、「チームの為に」という考えを挟んだ上で個人技能の向上に努めることが大切だということ、そして自分を高めるということに関しても、チーム内の役割を自認し「チームの為に」という想いを持つということが出来ているかどうかで成果が全く変わってくるということを学びました。4年間で学んだ一番のことは、これだと思っています。

そして最後の1年間は「エースとして10番としてチームを引っ張る」という決意のもと、プレイしていました。4年生として、メンタルユニットリーダーとして、後輩の面倒を見たりチーム運営に携わることも重要な仕事でしたが、自分が一番すべきこと、自分にしか出来ないことはこれであると考えていました。ほとんどのチームに技術・経験で劣り、劣勢に立たされる場面も多い中で、自分だけでも相手に勝るプレイをする。そうして勝利への希望をつなぐ、チームを勇気づける、「あいつならどうにかしてくれる」、そんな期待に応え、超えられるようなプレイヤーでありたいと思っていました。秋季で点を取った日文戦、学習戦、大東戦は、その想いが結果として表れてくれた試合だったかなと思います。ただ、そういうプレイが出来なかった試合の方が多かったです。でも、そんなときは周りの皆が助けてくれました。特に後輩たちが公式戦で頼もしいプレイをしてくれることも多々ありました。来シーズンは、さらにやってくれるでしょう。

この4年間は自分の足りない部分、弱さを自覚させてくれたいい時間でした。後輩たちにはサッカーに向き合い、チームに向き合い、自分に向き合う中で、何か学びとってもらえたらと思っています。また、いつも温かく、時に熱く見守り支え続けて頂いたOBの皆様には、感謝してもし尽くせないほどです。本当にありがとうございました。

🏆 綺麗ごととは書きません

小野 博充 (4年)



「昇格できなかったけど、良い経験になった。」

「試合には出られなかったけど、

チームのために頑張ったから満足している。」

そんな綺麗ごとで取り繕うことが得意な僕だが、ここではそんなの一切抜きで書こうと思う。

10月27日、秋季最終節大東文化戦、試合終了のホイッスルが鳴った時、僕は崩れ落ちた。

ピッチ上ではなく応援席で。何かを得たくて、このサッカー部に入ったわけではない。「サッカーが好きだから」、そんなシンプルな理由で僕は入部した。振り返ってみると、確かに結果として得られたものは多くあった。しかし公式戦に出続けていた他の同期は、僕では想像もつかないような経験が出来ているんだろうと思うと、僕が得られたものなんか、ちっぽけなものなんじゃないかと虚しくなる。「〇〇戦のお前のゴールは凄かった」とか、「△△戦は本当にきつかったな」とか、彼らは公式戦 1 試合 1 試合を主観で語っているのに対し、応援することしか出来なかった僕は、客観的にしか試合を語る事が出来ない。

怪我の時期が長く、試合に出るためのスタートラインにすら、まともに立つことが出来なかった4年の秋季は、特にもどかしい思いを抱いていた。大東戦終了のホイッスルが鳴った瞬間1部昇格の夢が途絶え、絶望したと同時にピッチ上で泣き崩れる選手を見て羨ましいとも思った。あんな試合、長い人生でも、なかなか経験できるものではないはずだからだ。

チームの1部昇格のため必死で取り組んできた。プレー面以外でも貢献できることはないかと考えて行動してきた。リーグ戦、自分が試合に出てなくても、心の底から一喜一憂していた。でも、あの最終節、ピッチに立っていた人とそうでない人では、どうしても流していた涙の濃さに差があると感じてしまった。

スポーツは勝ちか負けかの結果が全て。僕はその通りだと思う。引退したからこそ言えることだと思うが、チームというマクロな視点で見た時に1部昇格できなかった僕らは当然「負け」。そして個人というミクロな視点で見た時もまた、結局試合に出られなかった僕は「負け」なんだってことを振り返ってみて感じた。

🏆 チームへの思いを糧に

川口 望 (3年 女子 M)



私がサッカー部に所属していたこの3年間は、とても変化の大きな3年間だったのではないかと思います。1年生の時には、3部から2部への昇格という、とても大きな出来事を体験しました。

私は自分の仕事をこなすことばかりに気を取られ、その本当のすごさは理解できていなかったように今では思います。

2年目は2部という前年とは違う舞台で、苦しさを覚えることの多かった1年でした。2部で戦っていくために以前より多くのことを任されるようになり、やりがいを感じると同時に、それがなかなか勝利につながらず、マネージャーのチームへの貢献ということについて考えるようになりました。首都大戦では自分がマネージャーズ・ミーティングに出ていることもあり、チームに対する責任について深く考えさせられ後悔も少なからず残る1年となってしまいました。

そして、この1年は昇格したいという思いとチームへの思いを強く持ち続けた1年でした。昇格への強い思いを持ち、あるべき姿を示し続けた先輩方。それを支えよう、思いに応えようとした同期、後輩たち。全員の頑張りが目に見えて、尊敬の思いを抱くと同時に、自分も頑張らなくてはと思わされるばかりでした。

大東戦直後、学年やプレーヤー、マネージャーを問わず、全ての部員が強く悔しさを感じていたのが私は印象に残っています。昇格することは出来ませんでした。こんなにも強くみんながチームへの思いを持っているということを誇らしく思います。私自身、大好きだと思えるチームに所属できたことをとても嬉しく思っていますし、マネージャーにも、そのように感じることを出来る環境をつくってくれたプレーヤーに、とても感謝しています。

来年度は私の同期たちが中心となってチームを作っていきますが、今年以上にみんながチームを好きだと思えるように、そして何よりも1部昇格を成し遂げることが出来るように頑張ってもらいたいです。応援しています。最後に、常に現役を応援して下さったOBの皆様、マネージャーにもお疲れさまと声をかけてくださり、とても嬉しかったです。ありがとうございました。今後は一緒に応援していこうと思いますので、よろしく願いいたします。

🏆 お疲れさまでした

平田 芽子 (3年 女子 M)



何となくで入ったサッカー部も、気づけば、あっという間の3年間でした。朝早い日も、1日が長い合宿も、みんなで頑張った、いい思い出です。みなさん、お疲れさまでした。

引退が近くなった頃に、ふと考えると、私が自分のためにではなくサッカー部のために頑張ってきたのは、応援したいって思えるチームだったことと、これまで一緒に部活をやったマネージャーさんたちのおかげだと強く思いました。私を信じて仕事を任せてくれた先輩や、「めいこさんっ(^O^)」と笑ってくれた後輩。一番長い付き合いで、部活以外でも一緒に楽しんだ同じ学年のマネージャー。みんなと過ごす時間は大変なことも忘れてしまうくらい私にとって喜びでした。そんな部活にいくと会える大好きな友だちの存在を土台にして、みんなで一つの方向を向く、このサッカー部の一員になりたいと思うようになり、そのために頑張るみんなを応援したいと思うようになって、仕事に励むようになりました。

最後に勝てなくて、その時は虚しい思いで一杯だったけれど、今では違います。応援するって、こんなに楽しいことなんだなってわかったし、私も、あの熱いチームの一員に入れてもらえたんだって、すごく嬉しいです。毎年毎年、もう二度と同じチームで戦えない中で、今できる最大のことを考える、それが来年には出来て当たり前のことになって、さらに今できることを考えるというように、経験が積み重なっていく感じが実感できました。

このメンバーで戦った1年間、本当にお疲れさまでした。楽しくサッカーしながら勝ちにこだわるこのチームのこと、ずっと応援しています。来年は、私の学年のプレイヤーたちが引っ張るサッカー部が、最高にかっこいいパフォーマンスを見せてくれるって信じてます！

● 報恩謝徳

加藤 里菜 (3年 女子 M)



もう朝早く自転車に乗って小平に行く必要がなくなってしまいました。アウェイの試合の時、20キロ近く氷を買う夏も、もう来ません。氷柱を自転車のカゴ一杯に詰めることも砂を浴びながら走り回ることもありません。私の日常は、この3年間、部活を中心に回っていました。

1年の頃は、ただひたすら先輩たちについていくことしか考えられませんでした。自分のことに精一杯でチームのために貢献する余裕なんてありませんでした。そんな中、手にした昇格。ただ先輩たちのことを思うと嬉しくてしょうがありませんでした。新しい取り組みを、たくさん始めた2年。2部で迎える秋季は1年の頃とは全く違いました。全試合痛いほどの緊張が伝わってきて、何かしてあげたい、勝って喜ぶチームを見たい、その気持ちだけで頑張ることができました。そして最上級生の3年。前後期制が導入され心休まる時の少ない1年間でした。春季の快進撃。そして秋季の辛い期間。試合後うつむく皆の姿を見るのが負けるより辛かった。最終節の後、泣き崩れるみんなを見ていると、ふいに引退が現実味を持ってやってきて、自分の中心が無くなってしまった喪失感を強く感じました。でも、それよりも、この代でサッカー部にいられたこと、この代だから出会えたサッカー部の人たち全てへの感謝が強く湧き上がってきました。今の私があるのはサッカー部に入ったおかげです。

私は自分のためよりも、誰かのために努力したいと考えています。

常にチームのことを考える人の多いサッカー部は、全員を尊敬しあえる、素晴らしい環境でした。上を目指すには、どんどん変わっていかなければならない。そのことを教えてくれたのもサッカー部でした。友人と話をしていると、「部活大変だね」とか「辛くないの?」と言われることがあります。確かに生活の中で部活に捧げる時間は多かったけれど、それでも大変だとか、逃げたいだとか思ったことは一度もありませんでした。懸命に努力するプレイヤーの力になりたい、そう思いながら、プレイヤーの努力している姿、練習中、辛そうな姿を、近くですっと見てきました。

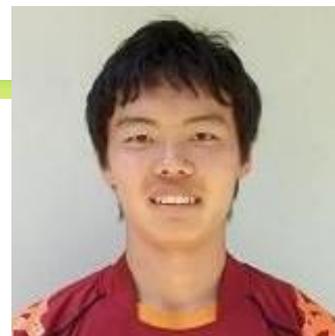
私は、この部活が大好きです。この部活に携わる全ての人が好きです。尊敬しています。

そんな人たちの力になれる、「ありがとう」と言ってもらえる、それだけで報われました。勿論、勝ったら嬉しいし、昇格できたらもっと自分の仕事が報われたと思えたと思います。でも、そうじゃなくても十分私は「感謝」をもらえました。マネージャーとして、こんなに幸せなことはないと思います。だから、ここでもらった感謝の分、少しですが私から感謝を返そうと思います。本当に本当にありがとうございました。来シーズン、うちの代のプレイヤーがグラウンドの喜びの中心にいる姿を見に行きます！ 来年こそは嬉し泣きさせてもらおうと思います。ずっとずっと応援しています。

平成 26 年度シーズンに向けて

情熱と覚悟を持って

小泉 武広 (3年 新 GM)



今年度 GM を務めます、3 年の小泉武広です。よろしくお願いいたします。昨年度は、たくさんの OB の方々が試合を見に来ていただきました。勝てない時期も温かい声援を送っていただき、とても励みになりました。ありがとうございました。

今年は 2 部優勝を目指します。そして来年度、関東昇格を達成できるチームを、この 1 年で作っていきます。高い目標であることは分かっていますが、本気の取り組みができる本気の集団であれば達成可能な目標です。僕たちは、まだまだ本気の集団とは言えません。今年の 2 部 4 位という結果は自分たちに見合った結果だと思っています。僕たちは本気でやっている気になっていました。自分たちは本気だと言い聞かせて、そこに満足していました。10 月 27 日の大東戦に負け、昇格を逃すまで、そこに薄々気が付きつつも、行動を起こせなかったことを後悔しています。

今年は情熱と覚悟を持ってサッカーに取り組みます。2 部優勝のためにできること、やるべきことは幾らでもあります。ここまでやればいいと、どこかで妥協するのではなく、やれること全てをやりきるだけの情熱を持ってサッカーに取り組みたい。また走りなどの苦しいことや一人一人が上手くなると昇格できないという現実からも、今年は逃げていたように思います。苦しいことにもしっかり向き合って、覚悟を持ってサッカーに取り組みたい、そのように考えています。それだけの取り組みができれば、2 部優勝が自分たちにとってふさわしい結果だと思えるはずです。昇格をかけた試合でも、今までやってきたことに対する自信を持って戦えるはずです。情熱と覚悟を持ってサッカーに取り組み、2 部優勝を達成して、その次の年も関東に昇格できる強い一橋を OB の皆様にお見せします。今年も温かい応援の程よろしくお願いいたします。

東西・西松会有志の会

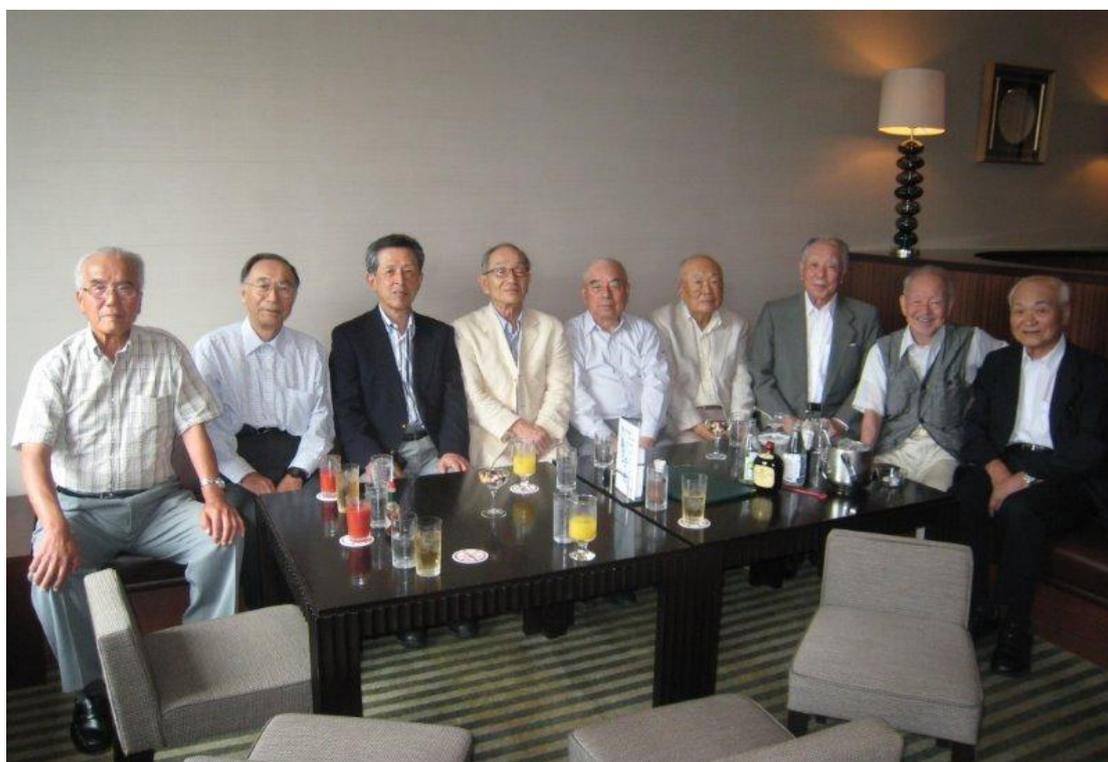
🏆 関東西松会（シニア）有志の会

松丸 鉦一（昭31卒）

平成25年は、夏に入った7月4日に、シニア有志9名が一橋クラブ「一葉の間」に集り、昼食をとりながら、いろいろ懇談する機会をもつことができました。参加者は神代（昭29）、石井・高田勝（昭30）、志摩・橋本・松丸（昭31）、浅井・佐竹（昭32）、岩坂（昭33）の各氏。神代、佐竹の両氏が、それぞれ山口、大阪から駆け付けた遠路組です。

話題として現役陣の都リーグ1部昇格への挑戦、参加者の勤め先に絡むJリーグ・チームの現状、W杯の世界各地グループの予選状況といったサッカーにまつわる事柄に加えて、本人の近況や仲間の消息などが主なものになりました。次回からは、この会の参加人数や懇談の度合いのことを勘案して、クラブ食堂ランチでスタートして同ラウンジで仕上げる方法をとる予定です。また連絡は出来るだけEメールを使うことも考えています。

平成26年はW杯が開かれます。この日程や参加者の都合などを考慮して会を開きます。ご協力の程よろしく申し上げます。



関西西松会のご報告 ～三商大戦への思い～

柴田 暁 (昭46卒)

今年は昨年の神戸に引続き市大で三商大戦が行われ、春からその話題で盛り上がった。特に最年長の松本先輩からは、春の懇親会で「三商大には必ず応援に行く」と約束頂いたのだが、当日は足を捻挫され残念ながら欠席となった。しかし秋の懇親会には元気な姿で出席され、酒の量も以前に比べ落ちていないのには驚いた。その松本先輩より三商大の前日にメールで「我々の時代の三商大戦では、どうしても神戸に勝てなかったので神戸にだけは勝ってくれ」との伝言を頂いた。とにかく昭和20年代当時の神戸大学は強かったようだ。

さて、その三商大戦だが、最近は以前と異なり1日ですべて行われている。そのため今年の組み合わせは一橋レギュラー対市大サブ、一橋サブ対神戸サブとなり、市大には7-1で大勝、神戸には0-6で大敗との結果となった。松本先輩の言われた神戸とのガチガチ勝負ということが実現できないのは残念であった。この辺は、夏の大変な時期に日程を裂き東京から来るのであるから、是非少なくとも一橋の1試合は、レギュラー対レギュラーにしてほしいと思う。

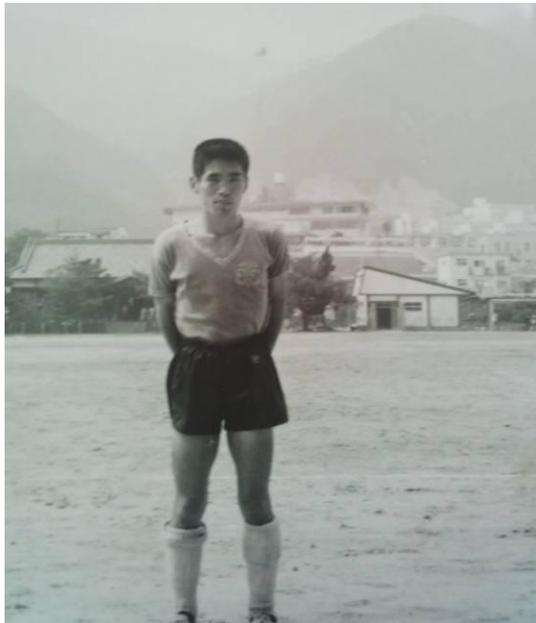
OB戦は、人数の関係で一橋・神戸連合対市大となった。試合は完敗だったが、名古屋から駆けつけた小林の見事な切り返しは、応援していた学生たちの拍手喝采を受けた。試合後は場所を梅田に移し、OBと学生5名との懇親会となった。ただ学生は試合後の整理等、また新幹線の時間等あり、わずか30分のみでの懇親となったのは残念であった。大倉は「月桂冠」で忙しい社長業の合間を縫って参加し、「我々4年の時に春は連戦連勝で秋のリーグ戦も優勝と思っていたら、結果は連敗となった。春の成績に油断するな」と叱咤激励。また宮脇よりは「勝負の秋、結果にこだわられ。毎週成績のメールを見るのが楽しみだ」との話もあった。

リーグ戦の結果は残念ながら大倉の危惧どおりになったわけだが、秋の懇親会では、嶋田先輩がネットから取り出された関東学生サッカーリーグ戦の構成大学の詳細を全員で見ながら、いかに東京リーグ1部の昇格が難しいかを再認識した。私の応援するガンバ大阪（神戸に在住ですが勤務の関係で申し訳ありません）が、今年J1復帰は楽勝と言われていたが、後半はバタバタだったように、上位リーグへの昇格は本当に難しい。

後日、嶋田先輩より50年前（昭和36年、37年頃）の三商大OB戦後の懐かしい写真が送られてきたので掲載します。やはり三商大戦はいつまで経っても思い出が尽きないものです。次回は、来年4月23日（水）、関西文化サロンです。



★昭和 36、37 年当時の
三商大 OB 戦後。
後列右から神代、松本、
水島（背広）、駒井。
前列右から嶋田、田原、佐竹



★昭和 45 年、4 年の時の三商大戦。
神戸大グラウンドで撮ったものです。
この時はグラマネでした。
グラウンドは今も当時と変わらず、
私は徒歩で 10 分ぐらいの所に居住。
時々、立ち寄っています。

◆春の部（4月15日）参加者

松本（S26）、神代（S29）、嶋田（S32）、佐竹（S32）、村林（S40）、
柴田（S46）、宮脇（S62）

◆秋の部（10月28日）参加者

松本、篠宮（S27）、神代、嶋田、柴田、宮脇

◆三商大戦懇親会（8月3日）

嶋田、佐竹、柴田、小林（S53）、深谷（S53）、大倉（S56）、橋詰（S56）、宮脇、
水谷（H4－OB戦のみ）

 ヒューストンに暮らして 27 年

篠崎 信弘 (昭 52 卒)

ヒューストンと聞いて、日本に住む昭和 35 年生まれぐらいまでの方々は、「こちらヒューストン」という同時通訳の故・西山千さんの声を思い出すのではないのでしょうか。アメリカ航空宇宙局の町として知られていると思いますが、この場をお借りして少々ヒューストンの宣伝をさせていただきます。

ここは全米第 4 位の都市で、ニューヨーク、ロスアンゼルス、シカゴの次です。殆どの日本人が 4 番目にあげる都市はサンフランシスコですが、実はヒューストンなのです。当地を NASA と結び付け、ロケットを打ち上げる砂漠の町と誤解しておられる方も多いと聞いていますが、日本の屋久島とほぼ同じ緯度にある亜熱帯の緑の多い町です。ロケット打ち上げはフロリダ州ケープカナベラルで行われ、ロケットの一番下が発射台の一番上を通過した時点で管制管掌がケープカナベラルからヒューストンに移る仕組みになっています。

ヒューストンの人口は約 400 万。テキサス州の広さは日本の約 2 倍、人口は 2010 年現在で約 2,500 万人です。実は全米 50 州中、このテキサス州だけが合衆国から独立できる権利を留保しています。町から 1 時間ほど走ると地平線が見えて来ます。その後は地平線だけが続き、東京にいた時には見たことがなかった空の大きさに最初は驚いたものです。ヒューストンから西に 3 時間ほど走ると、あの有名なアラモの砦跡があります。アラモでメキシコ軍に敗れた後「リメンバー・アラモ」を合言葉に、ヒューストン将軍が率いるテキサス軍がメキシコを破りましたが、あのルーズベルト大統領の「リメンバー・パールハーバー」は、このコピーなのです。

商社の駐在員として当地に来たのが、1986 年 6 月末……

それから 27 年半が経過しようとしています。娘 2 人も当地に来た時に 4 歳、2 歳だったのが今や 32 歳、30 歳の完全なテキサス人です。年金を確実に欲しいが為に、2007 年に米国に帰化しましたが、リーマンショックで、我々の受給開始時期に財源があるか極めて疑問になってしまいました。帰化後の日本行きは「帰国」ではなく「訪日」となり、米国籍のパスポートに「上陸許可」のスタンプを張ってもらい、指紋と写真をと取られての入国には少々寂しさも覚えます。

大学卒業後2年ほどは会社のサッカー部の活動にも参加していましたが、その後は専らテレビ観戦です。サッカーとの直接の係わり合いはなくなりましたが、私にとっての最大のサッカーイベントは2~3年に1度、日本に行く際に同期を中心にサッカー部の仲間が集まってくれることです。昨年も2年ぶりに訪日し、同期だけで雷門からスカイツーまで散策した後、33名の先輩・同期・後輩と「本当に」楽しい一時を過ごしました。同じ集まりを高校のサッカー部同期とも行っており、仕事での日本出張がなくなった私は、これだけの為に訪日している次第です。しかし今回は、米国に帰国してから時差ボケ解消までに2週間を要したことを思うと、今は「訪日は暫くいいかな」という感じですが、その内「行こうかな病」が出て来るんだと思います。このサッカー部の仲間は、私にとって家族に次ぐ宝であり、本当に有難いと思っています。

昨年10月にヒューストンで還暦を迎え、人生の半分近くを当地で暮らした者として、先日届いた同期の女子マネからのメールにあった非常に重い課題、「今後、如何に老いるか」を家内と考え、実行していきたいと思っています。最後に、友人が日本から取り寄せてくれた赤いちゃんちゃんこを纏った写真を添付させていただきます。



🏈 シドニー便り

松尾 俊彦 （昭和 58 年卒） 豪州住友商事シドニー鉄鋼部

1983 年（昭 58）に法学部を卒業して旧日商岩井（現双日）に就職し、最初の駐在が 1991 年のシドニーでした。1999 年に豪州住友商事に現地社員として転職し、永住権を取り、そのままシドニーに住み続けて 20 年以上が経過しました。当時は、まだまだ終身雇用制度が残っていた時期でもあり、とんでも無い変わり者と言われたものですが（年収が 3 分の 1 になり、専業主婦だった家内が兼業主婦になりました）、現在では結構小職のような駐在員からの転職・永住組が出て来ております。（会社一筋の人が減ったと言う事でしょうか、それとも小職のようにお金に執着心の無い人が増えたのでしょうか？）

★小職の事務所から見える風景

赴任当時は娘が 4 歳で、赴任 3 年目の 1993 年に息子がシドニーで生まれて家族が 4 人になり、当時は 30 代前半で若かったこともあり地元のおじさんサッカーチームに入れて貰って、週末には子供をほったらかしてサッカーに熱中していたのですが、それも 40 歳まで。ここ 10 数年はサッカーボールにさえ触った事が無い体たらくとなっています。（46 歳で現役バリバリのカズさんは本当に凄い！）。



最近の当地でのサッカーの話題と言えば、小野伸二選手が活躍した Parramatta Wonderers の A-League 優勝ですね。彼の出身が小職と同じ静岡県沼津市なので、若い頃から大変親近感を持って見ていた選手で、今年 8 月に家内とホームグラウンドに Sydney United（その昔、カズさんがレンタルされていたチーム）との試合見に行き、イタリアから移籍して来たデルピエロが、相手チームでプレーしているのを見ることも出来ました。（勿論、Wonderers の勝ちでした！）小野伸二選手は、地元の Parramatta（シドニーの 20 km 西の Downtown）でも大変な人気者ですが、そればかりではなく、夜のシドニーの街の日本人経営クラブでも有名人のようです。（単身赴任のようなので）どうやら来年も契約を延長したようなので、また一度試合を見に行きたいと思っています。それでは最後に西松会の益々の発展を南半球にて祈念しております。

少年期と老年期（プロローグ）

神代 祥男 （昭29卒）

少年期と老年期

神代祥男(529卒)

(プロローグ)

西松会新聞への寄稿の依頼を受けました。昔話でもと考えたものの、なかなか具体的に筆がすすみませんでした。少々、昔話にこだわった点もありますが、特色として挙げれば「少年期」と「老年期」だろうかと思いを巡らすことになりました。

(少年期)

私が少年時代を過ごした小学校は存在しませんが、少年化による廃校などとは違っています。一九四五年の敗戦とともに中国・青島市にあった私の母校は廃校となってしまったのです。この小学校には四百米のトラックがとれる広いグラウンドがあり、冬季には三つのサッカー場が設けられました。従って四年生からサッ

カーと縁がありました。

一九四三年に旧制山口中学校に進学しましたが、もう戦時体制下であり、球技は一切存在しませんでした。一九四五年三月末から八月の敗戦まで学徒勤労員で工場で働いていました。

一九四六年には球技が復活し、私もサッカーと取り組んだのですが、素足でボールを蹴っていたので、足首を捻挫してしまいプレイすることを断念しました。

一九五〇年に一橋大学に進学し、そこで再びサッカーを始めることになったのでした。ここからサッカーとの縁は青年期・壮年期と続きました。この部分は多くの皆さんが体験していることでしょうから省略します。

(老年期)

一九八三年から勤務地が「山ロー」となりました。ここには県協会の役員(副会長)を引き受けると、四十雀クラブ東京のチーム

3

が一九八六年に遠征してきて親睦試合をしま
 した。この二つが特筆事項でしょうが。
 後者は山口県内の各地に四十才以上のチ
 ムを誕生させるという効果がありました。
 厚生労働省所管の全国健康福祉祭（通称ね
 んりんピッツ）という行事があります。内容
 的にはスポーツ・文化と多岐にわたるもので
 参加資格は六十才以上ということになってい
 ます。一九九八年の愛知県大会からサッカー
 も競技に加えられました。
 前記の四十雀チームの六十才以上の者がチ
 ムを作り参加することになりました。
 私も一九九九年の福井県大会（会場：丸岡
 町）、二〇〇一年の広島県大会（会場：広島
 市）、二〇〇二年の福島県大会（会場：ジビ
 レッジ）に参加しました。更に二〇〇四年に
 は日本協会主催で、熊本県を会場に高令者の
 大会があり、山口県チームとして参加しま
 した。私はその年の十一月から湯方で入院治療
 を受ける身となり四十五日にも及びました。

コナミ ケータイ 20x20

4

以後、自分でプレイすることは出来ず、観
 戦する方に転じてしまいました。残念至極と
 言うほかはありません。
 四十雀クラブ東京は年令でパンツの色を区
 分しています。七十才になった時には「銀色
 パンツ」を貰いました。八十才からの「金色
 パンツ」が目標でしたが逃したようです。
 こんな採マな体験をしました。現在も、
 「四十雀クラブ東京」と「山口県六十雀クラ
 ブ」に所属しています。
 最後に我田引水になります。二〇一五年
 秋に才二十八回全国健康福祉祭やまぐち大会
 が開催されることになったことを申し上げ
 げておきます。
 （終）

コナミ ケータイ 20x20

関東大学2部リーグ残留にこぎつけた1点

池田 致 (昭和39年卒)

『一橋大学ア式蹴球部60年史』(昭和57年2月24日発行)の137ページに、昭和37年卒業の梅田 清先輩が書かれた「サッカー部活動の回想」があります。リーグ戦を総括して、「7戦して1勝もあげることができず、日体大と同率で7位となり、改めて7、8位決定戦を行うこととなった。決定戦は御殿下グラウンドで行われ・・・一進一退を繰り返したが、我軍は後半、池田君(当時2年生、現日本鉱業勤務)のミドルシュートによる値千金の1点を得て辛うじて勝利を得た。敗れた日体大は、その後の入替戦でも勝運に恵まれず3部転落となった。」とあります。

ところで私の記憶では、私のあげた得点は決定戦ではなく、7戦目の日体大戦でした。7戦目の日体大戦は、御殿下グラウンドの時計がタイムアップ時間を過ぎてなお、1-2とリードされ、敗色決定的、絶望的な状況にありました。グラウンドの周りでは、日体大の部員が勝利を確信、大声で応援歌を歌って実に不愉快な雰囲気でした。だが、その時、多分右DFの吉田さん(昭和38年卒 当時3年生)からだと思いましたが、大きなクロスがあがり、ボールが相手GKとDFの狭い間に落ち、そこに偶然とでも言って良いようなタイミングで、私が飛び込んで蹴り込み、まさに奇跡的な得点につながったのです。この時、頭の上半分がひどくしびれました。今でも鮮やかに蘇る、私の学生時代最高のプレーでした。これで辛うじて引き分けとなり、決定戦にもちこまれたのです。決定戦は激しい戦いとなりましたが、たしか日体大に退場者が出るアクシデントがあって、日体大がもろくも崩れ、なんとか勝利したという記憶が残っています。かくて一橋大学サッカー部は、この後しばらく、関東大学2部リーグで活動し続けることになったのです。

梅田さん！ 私の名前を60年史に銘記していただき、ありがとうございました。

歴史ある「一橋ア式蹴球部」について

有田 稔 (昭 44 卒)

昨年 11 月に「如水会多摩北支部」(西東京市、小平市他 5 市) の例会に初参加しました。懇親会の冒頭に参加者最長老(88 歳)の金子恒雄さん(昭和 22 年卒)による乾杯の音頭があり、暫く懇談の後、初参加者の挨拶で小生が指名されました。簡単な自己紹介の後、大学サッカー部の PR もしました。

1. 大正 10 年の創部で 92 年を迎える歴史のある部であること。
2. 東京都リーグ 2 部に所属し、今年は最終戦に勝てば 1 部昇格になるところ惜敗し、4 位に終わったこと。
3. 対戦相手の私立大学のグラウンドは、ほとんどが人工芝で、
我が校だけが関東ローム層の土のグラウンドであること。何とか人工芝にしたいと。

その後、懇談が続き、会も終わりに近づいた時、乾杯の音頭を執られた金子先輩より、「初参加の有田君がサッカー部 OB との挨拶がありましたので、一橋大学サッカー部に素晴らしい人物が居たことを紹介いたします。」と前置きがあり、松浦巖大先輩(神戸一中：全国大会で優勝 → 東京商大入学 → 学徒出陣 → 4 年次・主将 → 昭和 22 年卒 → 兼松江商)の人物紹介がありました。サッカー選手としては、在学中に東日本学生選抜代表(昭和 21 年 2 月・東西学生選抜対抗戦)にもなった名選手(名 CH)であったこと。社会人としては、兼松江商の社長となられたが、59 歳で夭折されたこと。人間的にもスケールが大きく、後輩の面倒見の良い、尊敬する先輩であったこと等々、まさかの席で、大学サッカー部大先輩の話が披露されたことに大変感激し、我がサッカー部を誇りに思い、歴史を感じた次第です。

我がサッカー部は歴史と伝統があることを皆さん充分ご存じのことと思いますが、再確認したいと思います。各大学サッカー部のホームページ等で創部年(各大学の体育会の部として大学から認められた年)を調べた結果は次ページの通りです(全ての大学サッカー部を調べていないので、他に歴史の古い大学があるかも知れません。また、創立として大学のクラブチームで古い大学があります)。早稲田、慶応より創部は古く、5 番目ぐらいに位置しているようです。正式部名の「一橋大学ア式蹴球部」ですが、「ア式蹴球部」の部名があるのは「東京大学運動会ア式蹴球部」「早稲田大学ア式蹴球部」のいずれも大正時代に創部された 3 校のみです。

創部年	正式部名	所属
明治 29 年	筑波大学蹴球部	関東 1 部
大正 6 年	神戸大学体育会サッカー部	関西 2 部
大正 7 年	東京大学運動会ア式蹴球部	東京都 1 部
大正 7 年	関西学院大学体育会サッカー部	関西 1 部
大正 10 年	一橋大学ア式蹴球部	東京都 2 部
大正 10 年	明治大学体育会サッカー部	関東 1 部
大正 11 年	法政大学体育会サッカー部	関東 2 部
大正 13 年	東京農業大学農友会サッカー部	関東 2 部
大正 13 年	早稲田大学ア式蹴球部	関東 1 部
大正 14 年	京都大学サッカー部	関西 2 部
昭和 2 年	慶応義塾体育会サッカー部	関東 1 部
昭和 2 年	中央大学学友会サッカー部	関東 1 部

フットボールにはサッカー、ラグビー、アメフトがあり、これを区別するために当時はサッカー → ア式蹴球、ラグビー → ラ式蹴球、アメフト → 米式蹴球と表現したようです。さらに Wikipedia によれば、1922 年（大正 11 年）に行われた日本最初のサッカーリーグとなる「専門学校蹴球リーグ戦」（この年に 2 回実施して中止となった）に東京帝大（東大）、東京高等師範（筑波大）、早稲田大学と、我が東京商科大学（一橋大学）の蹴球部が参加したようです。以上のように創部も古く、日本最初のサッカーリーグにも参加した歴史ある部と言えます。「一橋大学ア式蹴球部」が歴史と伝統のある部であることを再認識して、現役の皆さんは試合に臨み、我ら OB は応援することにいたしましょう。

（追伸）シニアサッカーのお勧め

小生は今年 67 歳ですが、現在も月 2 回シニアサッカーを楽しんでいます。東京在住の神戸高・神戸大サッカー部 OB（原則 45 歳以上）を主体とした「アミーゴス」というチームに、縁あって 9 年前から参加させてもらっています。最高齢者は 77 歳で小生は上から 7～8 番目でしょうか。激しいチャージ・スライディングはなし、15 分ハーフ 6 本の内、3 本程度プレーしています。東京都にも 60 歳以上を対象にした「SOI」という任意団体があり、月 8 回程度プレーされているようですから、シニア対象のサッカークラブもたくさんあるようです。プレー後の飲み会も活発で交友関係も広がります。70 歳代になってもプレーができる環境がありますので、是非ともシニアサッカーを楽しみましょう。

★昭和 40 年（1965）の夏合宿

小平グラウンドです。こんな汚い身なりで練習していました。

左：清水さん（4年、キャプテン）／ 右：有田（1年）



★昭和 41 年（1966）の夏合宿

雑魚寝で、布団は各自が自宅、寮、下宿先から持ち込みました。



京都サンガ応援記

大倉 治彦 (昭 56 卒)

京都サンガ後援会が発足して 20 年近くになりますが、発足当初から副会長を務めています。会長は堀場製作所の堀場厚社長で、私と同じくサッカー経験者です。京都サンガができるまでは欧州のサッカーや日本代表の試合を楽しみにしていたのですが、徐々に地元チームへの愛着が高じてきて、今では京都サンガ一筋になっています。今年はワールドカップの年ですが、恐らくワールドカップ観戦よりも京都サンガの試合を優先することになると思います。J2はワールドカップ期間中も中断しないのでよかったなどと言うと負け惜しみになるでしょうか。

それにしても勝負弱いチームです。

2 年前から 1、2 位は J1 へ自動昇格、3~6 位でプレーオフを行い、その勝者が J1 昇格という方式になっていますが、京都サンガは 2 年連続で 3 位になりプレーオフで敗退しています。一昨年の大分戦も昨年の徳島戦も期待を込めて観に行ったのですが、残念ながら昇格の夢は叶いませんでした。ここ 10 数年の間に 3 回昇格して 4 回降格するという、応援する側にとっては気の休まることのないチームですが、根気よく見守っていきたいと思います。

明るいニュースもあります。京都府が新スタジアムの建設を決定したことです。

現在の西京極競技場は観客席に屋根がなく、陸上のトラックがあり、試合が観にくいなどの欠点があるため、新しいスタジアムの建設は長年の課題でした。当初は京都市に要望していたのですが、資金難と用地の問題で計画が頓挫したため、改めて署名を集めて府にお願いすることになり、私が署名集めを行う“推進する会”の会長を引受けることになりました。

前回 35 万人の署名を集めて市に提出していますので、それを上回ることを目標に街頭や競技場で署名を募った結果、48 万人の署名を集めることができました。予定通りにいけば 3 年後の 2017 年から新スタジアムをサンガのホームとして使用する訳ですが、それまでに J1 に昇格できるよう、より一層の応援を続けていきたいと思っています。



蹴球巡礼：不毛の国と母国と王国

伊地知 嗣典 （昭 57 卒）

倉崎君から本稿執筆を依頼するメールを受け取った時、正直、何を書いたらよいものか思案に暮れるところであったが、最後に付記してあった「テーマはサッカーの母国と王国の違いについてなんてどう？」という御丁寧な彼のサジェスションを見て、そういえば西松会会員の中にも3度の海外駐在を経験された方は数多いらっしゃるに違いないが、小生が赴任した3か所は、①南米の蹴球不毛国ベネズエラ、②母国の英国、③王国たるブラジル、というサッカーという視点から見ると非常にユニークな組合せだった事に改めて気付かされた次第である。そういう訳で、この3か国で小生が見聞・経験してきた蹴球与太話を、つらつらと書いていこうと思う。

① ベネズエラ・カラカス (1993~1999)

南米北部に位置するこの国に小生が赴任したのは、Jリーグ開幕直後の93年夏の事。MLBの選手には同国出身者が少なくないが、日本のプロ野球でもマルカーノに始まり、カブレラ、ペタジーニ、ラミちゃんなど数々の強力助っ人を排出してきた大変な野球王国である。一方、この国のサッカーはといえば南米連盟加盟国では唯一W杯出場経験がなく、当時はW杯予選、南米選手権とも最下位が定位置という惨憺たる有様だったのだが、そこは腐っても南米の一角というべきか、町の至る所にあるフットサルコートでは、毎夕、近隣のチームが三々五々集合しての勝残り戦が延々と繰広げられていた（順番を待てば誰でも飛入り可能という超民主的な運営方式）。また小生もコーチとして参画していたカラカス日本人学校の児童チームの練習も郊外の良質な天然芝が使えたし、思い起こせば、ことインフラに関しては非常に恵まれた環境であったと思う。これは、昨年逝去したチャベス前大統領の長年に亘る悪政で、すっかり経済的に疲弊してしまった同国だが、元々は世界でも有数の石油収入を誇る産油国として栄華を誇った時代の名残とも言え、2007年に同国で開催されたコパ・アメリカに向けた育成強化が実を結び、ブラジルも苦戦を強いられる南米でも中堅どころの実力国（2011年のコパ・アメリカではベスト4）となり得たのも、かようなインフラの下地があったが故なのだと思う。

さて、この日本人学校児童チームだが、小生が同じ芝生でもゴルフよりもサッカー指導に勤しんだことによるものかは全くもって不明ではあるものの、素直で運動神経にも恵まれた子供たちが揃っていたおかげで、米・英系のインターナショナル校が集まる定期交流戦で連続優勝を成し遂げる等、指導者冥利に尽きる貴重な経験を積みさせてもらった6年間であった。

② 英国・ロンドン (2002~2007)

日本に帰任した 99 年以降、欧州向けのビジネスに携わることになり、定期的にドイツに出張するようになった。正直、当時の担当業務は非常にストレスフルなものだったが、その内、出張中の週末には鉄道を乗継いで独各都市でのブンデスリーガや、お隣のオランダリーグ観戦に出掛ける術を体得。少年期に三菱ダイヤモンドサッカーで憧れた世界を実際に体感できた時間は、週中に蓄積した疲労感も吹っ飛ばすほどの喜びを与えてくれた。

2002 年になると従事していたビジネスの欧州本格展開の責任者として欧州への出向が決まり、家族に先行してロンドンに着任。家探しと同時にプレミア観戦環境の整備にも着手した。当時はベンゲルイズムが定着したアーセナルが絶頂期を迎えていた時代で、小生もグナー（愛称ガナーズから、そのサポはこう呼ばれる）となるべく年間チケット入手をトライするも、何万人待ちというすさまじい状況を知って即断念。その代り姑息な手段ではあったが、地理的には家から近く稲本の移籍先でもあった比較的人气薄のフラム・サポに成りすまし作戦を思いつき、同チームのクレイブン・コテージ（直訳するとカラス小屋）スタジアムのシーズンチケットを入手。MAN・Uルーニー、クリ・ロナ（当時）を始めとするクラッキ達のプレイを専用スタジアムでこそその臨場感をもって目の当たりにすることができた。プレミアの醍醐味はプレイだけではない。J のように拡声器で鼓舞するリーダーなどおらずとも自然に湧き上がるチャント。絶妙のタイミングで発せられるミスへのブーイングと好プレイへの拍手。この雰囲気こそ、まさに J が開幕 20 年を経ても足元にも及ばないフットボールカルチャーの真髄ともいえる。

更にはロンドン時代も後半になると、左膝の大怪我（前從事靭帯断裂）で自らのプレイを断念せざるを得ないという残念な経験もあった訳だが、プレイ引退を契機に観戦熱には一層の拍車がかかり、サンチャゴ・ベルナベウ、キャンプ・ノウ、サンシーロなど、週末を利用しての大陸弾丸ツアーを度々敢行することになる。キャンプ・ノウでのロナウジーニョとメッシの共演も感涙ものであったが、最も感動的だったのは、絶頂期中村俊輔をスコットランドの聖地で見届けられた事かもしれない。左足から魔法のパスを繰り出す度に拍手が沸き起こるセルティックパークでの彼は、観ているだけの小生にも自分自身が日本人に生まれた事を誇らしく思わせてくれる程の華麗さでピッチを支配、まさに至福とも言える 2 時間であった。欧州サッカーの魅力は地域に根付いた文化としての深みとともに、事程さように小生のような来訪者にも確実に至福の時間を与えるエンターテイメントとしての産業成熟度にもある訳であり、この辺りは、今後とも J が真摯に学んでいかなければならない点ではないかと思う。

③ ブラジル・サンパウロ (2010~2012)

「いよいよ明日ね?」「ほんと、ドキドキしちゃう」。これは翌日にサントス vs コリンチャンスというパウリスタ選手権の大一番を控えた或る土曜日の午後、単身赴任中の小生が毎週通うリベルダーヂ（東洋人街）のスーパーで交わされたレジとお客のおばちゃん同士の、ブラジルでは極めて日常的な会話である。噂には聞いていたものの、かの地ではW杯のセレソンの試合時には本当に学校は休みだし、企業、役所、銀行、お店も試合前後の2時間含めて操業中断が義務付けられるなど、老若男女問わずフチボルが、まるで空気の如く日常生活の一部として存在している事を証明する事実は、枚挙に暇がない程である。逆にその為にクラブや協会には、企業努力で顧客満足度を向上させようという意識は希薄であり、結局、2年間を通じて小生がブラジルで観戦したのはコリンチャンスの1試合と、スポンサー枠でVIP席をゲットした国際親善試合の対オランダ戦のみである（困みに、この時は前列に座っていた今や国会議員のロマリオと、またサンパウロへの帰途では、同じフライトに乗り合わせたネイマール含むセレソナー一行と握手する恩恵に恵まれたのだが・・・）。

何せ真昼間から交差点の信号待ちでも拳銃強盗に出くわすのが日常茶飯事という世界では、スタジアムでも生命のリスクは無視できないし（最初の経験が悪評判サポのコリンチャンスであったためのトラウマかもしれないが）、ピッチとの距離や座席の作りなど、およそ観戦環境が劣悪過ぎ、有料テレビで楽しむ方が余程、安全・安心・快適という結論に至った次第である。とは言いつつも、小生もこうした環境不備や安全面での問題も、W杯開催を機会に解消するものと楽観視していたのだが、昨年のコンフェデ開催時にサンパウロのバス運賃引上げへの反対に端を発したデモの発生は再燃の兆候を見せるインフレや、いつまでも根絶できない汚職など政府の経済・福祉政策への庶民の不満が爆発したもので、従来のブラジル国民＝サッカー愛という図式は最早単純には成立しない程、国民の不満が臨界点を超えつつある事も認識しなければならないかもしれない。そうした意味から、折角ブラジル永住ビザを有しながらも、現地でのW杯観戦を鼻から視野に入れていない小生の選択も、あながち間違いではないのでは、との意を強くしている。

④ 最後に

卒業後 32 年を経た今、思い返せば人生最大のうれしい誤算は、小生存命中には絶対にあり得ぬと思っていた日本のW杯出場が実現したばかりか、日本人選手が欧州一流クラブでプレイし代表のW杯出場も当り前というような日が来ることなど、小生が現役の時代には、一体誰が予想しえたであろうか？ それもこれも93年のJ開幕で実現したプロ化が今日の隆盛への大きなターニングポイントだった事は勿論だが、それと同時に拙稿をお読みの多くの諸兄も参画されたであろう、地域・小学校単位クラブにおける草の根レベルでのボランティアな指導による底辺の拡大が貢献した事は紛れのない事実であり、この場を借りて、皆さまの献身的なご協力に改めて敬意を表しながら筆をおくこととしたい。

東大 OB 戦に参加して

谷口 浩 (昭 61 卒)

1 月 5 日の東大 OB との初蹴りに参加しました。

昭和 61 年の同期組は 8 名中 6 名 (1 名は応援) が参加し、一橋大 OB 23 名中、最大勢力として活躍？しました。試合後 1 月から新しい職場へ移ることになる幸松君の壮行会を予定していたことありますが、卒業以来サッカーで、これだけ同期が集まったのは初めてかと思います。プレイの内容はともかく、久々にサッカーをし、酒を酌み交わす楽しい 1 日となりました。

思えば我々同期も 50 代に突入し、休日の過ごし方に少し余裕が出来たり (家族から相手にされなくなり)、30 年近くになる仕事においても転換点を迎えたりと、ひとつの節目を感じるこの頃です。いろんな思いが交錯するこの時期、同期や先輩・後輩たち昔の仲間と再び自分たちの原点であるサッカーができることは、改めて自分を見直す貴重な時間と実感しています。

ところで対戦相手の東大 OB は一橋大 OB の約 2 倍に相当する約 40 名が参加しており、元々の部員数の差もあるかもしれませんが、OB 会活動への参加意識の違いを感じさせられました。卒業後、同世代や職場、地域などで個別に西松会との関係は継続されていると思いますが、仕事や家庭が忙しく、総会など西松会全体イベントには、なかなか参加できないのが実情かと思います。サッカー部 OB 組織である西松会活動を活性化するポイントは、如何にサッカーに触れる機会を設けるかということにあるような気がします。年相応にプレイを楽しみ、幅広い世代でサッカーを共有することが重要で、その点、長年こういった OB 戦をアレンジ頂いている山根先輩、倉崎先輩には本当に感謝いたします。

私自身ここ数年、年 2~3 試合は現役の試合を応援に行き、自分たちの頃とは数段レベルの高いプレイに感心しつつ、勝負に対する気魄、情熱に触れて、勇気をもらうことを楽しみにしていました。今シーズンは今一歩で東京都 1 部昇格を逃し残念ではありますが、素晴らしい試合を見せてもらいました。現役の皆さんありがとう。今後はなるべく自らもサッカーする機会を増やし、西松会での活動を楽しんでいこうと思っています。

 雑感

金谷 齋 (平 1 卒)

ひょんなことからジュニアの指導をすることになって 4 年になる。

昭和 61 年卒の幸松さんが以前より所属されていた、あざみ野のシニアチームに入れて頂き、その会則により下部組織にあたるジュニアチームの指導をしている。代表は東京都学連理事長で、東工大にお勤めの丸山剛生さん。子供たちの中には元日本代表で横浜 F マリノス現役選手の息子さんや、同じく元日本代表で現新潟アルビレックスコーチの方の息子さんなどがおり、サッカー好きの集まる賑やかなチームだが、昨今流行りのクラブチームではなく、あくまで、あざみ野地区の子供たちとサッカーを楽しむことを目的とした地元密着のチームだ。

ジュニア年代にサッカーを教えるためにサッカーを勉強し直してみても、改めてサッカーの難しさを感じる。世界のサッカーも、ここ 10 年、特にバルサのを見せてくれた、それまでとは一つ次元の違うサッカーで大きく変わった。良いプレーとは？ 良い選手とは？ 良いチームとは？ 元来言葉や文章や作戦ボード上のマグネットでは、なかなか言い表せないのがサッカーだが、その難しさが増しているような気がする。22 人の複雑で自由な関係性の中で、フィールド上には一瞬たりとも同じ場面はなく、そこには無数の選択肢と結果が存在する。少なくともジュニアにおいては言い表し過ぎることで、より大きな可能性を削ぐことがあると感じることすら多い。

では、果たして大学サッカーにおいてはどうか？

1 月の OB 戦で久しぶりに現役のプレイを見た。日本サッカーの足跡と同様、選手全員の平均的な技術レベルは、昔と比べ格段に向上しており、日本における若年時からの技術指導の定着と、それ以上に選手層の圧倒的な拮据りが当校のような入学する選手を選べないチームにも再び光を差しているのかもしれないと感じた。ただ敵味方双方のレベルが高くなればなるほど、フィールド上の 22 人の混沌の中で、何かもう一段の違いを出していくことは逆に難しくなる。勝負の争点も広く有効なスペースを作れるかどうかから、厳しいプレッシャーの中で適切な判断をするための一瞬の時間が作れるかどうかという刹那な世界に入ってきた。一時期の風間筑波に 1 つのヒントがあったような気もするが、もっと別のヒントもあるかもしれない。やはりサッカーは難しい。でも、だからこそ何か掴んだ時の楽しさが増しているとも言えるだろう。ソチ五輪のレジェンドも、最初から簡単に勝利に辿り着けなかったからこそその今。間違いなく簡単ではないと思うが、去年のシーズンがあったからこそそのサッカーをチーム全員の手で見つけ出して欲しい。あざみ野は教育熱心な土地柄だ。こちらは、いつの日か一橋大学に主力選手を送り込むことを胸に秘めて、練習中に小僧どもが仕掛けてくる七面殺し攻撃に、今しばらく耐えることにしたい。

一橋サッカー一部卒業10年目を迎えるにあたり

前田 和也 (平16卒)

卒業10年目の節目を迎えるにあたり、自分自身の振り返りと現役の皆さまへのエールの意味を込めて寄稿させていただくことにしました。私は2001年に入学入部し、4年生時にはGMを務めさせていただき、その際、私は幾つかの新たな取り組みを導入しました。その内の1つは、各選手の自ら“考える”ことを促すべく、ミーティングの取り組み方を変えたことです。この春、社会人10年目を迎える今日、自ら“考える”という行為の重要性を改めて実感しています。

私は、この1月まで6年間ドイツに駐在していました。現地での仕事は非常にやりがいのあるものでした。しかしながら振り返ると6年という歳月は長く、良い意味でも悪い意味でも慣れてしまい、特に終盤は仕事や人生の目的がぼやけ、漫然と日常を過ごしてしまっていました。帰国にあたり、じっくりと時間をとって自分の仕事、人生の目的を“考える”ことに立ち向かいました。今でも100%納得できる答えを見つけることができたわけではないですが、仕事・人生に対して以前よりもはるかに明確なヴィジョンを持つことが出来ました。ヴィジョンが明確になったことにより、日々の行動も変わり、以前よりも高いモチベーションで毎日過ごすことができていることを実感しています。

現役皆さんの活動はブログにて拝見させていただいています。特にこの数年間は、皆さんが自分は何故一橋サッカー部でサッカーをしているのか、また強くなるために個々人が何をすべきかというテーマについて真剣に考えていることが、ひしひしと伝わってきます。これは日々の活動のモチベーション向上、ひいてはチーム力の向上に大きく寄与していることは間違いないと思いますし、現役選手個々人にとっても、今だけでなく将来にわたって非常に有益なことと感心しています。

現在の一橋サッカー部が、自ら“考える”ことのできる自律的な組織であることを非常に誇らしく思うと共に、そのような環境の中で活動している皆さんをうらやましくも思います。ぜひ自分たちの活動に自信と誇りを持って、日々邁進してください。今年も、これからも、我々に刺激を与える存在で居続けてください。ガンバレ！一橋イレブン！

★ドイツで所属した日本人サッカーチームの仲間との写真を添付します。
中央で白のユニホームを着ているのが私です。
余談ですが、欧州で毎年日本人サッカーチームが集まって大会を行っており、
このメンバーで昨年優勝しました。
さらに余談ですが、最前列で仮面ライダーのようなポーズをしているのは、
柏レイソルの増嶋竜也選手の、お兄ちゃんです。



⚽ いやはや、なかなか・・・

福本 浩（昭 52 卒） 編集長

西松会新聞を WEB 化する役目を仰せつかってから、はや数ヵ月。

安請け合いしたものの、いやはや、なかなか、思ったより大変でした。創刊号から第 6 号まで編集長を務めてこられた相良先輩に、改めて敬意を表します。さらに編集作業の過程で、西松会幹部の方々や現役の諸君が様々な取り組みをしていることを、恥ずかしながら初めて知りました。すべての原稿に目を通しながら一橋大学サッカー部が刻んできた長い歴史にも思いを馳せました。この西松会 WEB 新聞が、未永く OB と現役の気持ちを結ぶメディアとなるように願ってやみません。

この西松会 WEB 新聞は OB・現役の寄稿を掲載するだけでなく、

OB 掲示板 と **写真アルバム** というコーナーを設けています。**OB 掲示板** では、随時サッカーに関する話題などを取り上げ、皆さんの意見交流の場にしていきたいと思っています。どしどしコメントを寄せてください。**写真アルバム** では、様々な時代の小平グラウンド、部室、合宿所、学園西町の風景などが映っている写真を集めたいと思っています。なかなか風景のみの写真は撮ってないと思いますが、例えば下の写真。昭和 50～51 年頃（1975～1976）の小平グラウンドでの写真ですが、右手奥に、現在は見捨てられたようになっているシュート板が見えます。私は全体練習の後、よく 1 人でこのシュート板を使い、ダイレクトパスの練習をしたものです。



次の写真は、有田さん（昭 44 卒）が送ってくれた昭和 40 年（1965）の小平グラウンドです。

この頃は、グラウンドの向きが現在と 90 度違い、玉川上水側の林に沿ってサイドラインが引かれていたそうです。写真の左手奥が玉川上水側の林だと思います。私が入学した昭和 48 年（1973）は、すでに現在と同じ状態だったので、昭和 44 年～47 年の間に変わったのだと思います。

こんな具合に時代の違う小平グラウンドの写真を並べてみると、いろいろな発見があると同時に一橋大サッカー部の歴史が鮮やかに伝わってきます。



西松会 WEB 新聞の記事は、毎年 3 月 1 日に更新していきますが、[写真アルバム](#) への投稿は随時受け付けています。これは！と思う写真がありましたら、下記のメールアドレス宛てに撮影された年、場所、状況など簡単なキャプションを添えて送ってください。紙焼き写真を、そのまま送ってくださっても結構です。その旨ご連絡いただければ、送り先の住所をお伝えします。とにかく写真は何枚でも掲載できるので、寄稿した記事に写真を追加したいと思った方も送ってください。みなさんで西松会 WEB 新聞を盛り上げていきましょう。どうぞよろしくお願い致します。

fukug1954@db4.so-net.ne.jp

福本 浩